

秦テルヲ《アブサンとシヤヌイー》 絵葉書

「絵葉書情報」

秦テルヲ《アブサンとシヤヌイー》

モノクロ

未使用

発行所・印刷所無表記

原画完成時期 一九一三（大正二）年六月

絵葉書発行時期 一九一三（大正二）年六月～一九三三（昭和八）年頃

図版 一二・四〇×八・四五センチメートル

絵葉書 一四・二〇×九・〇〇センチメートル

「解説」

この絵葉書には日本画家の秦テルヲの作品《アブサンとシヤヌイー》の図版が印刷されている。図版のキャプションには「テルヲ氏作品^(註一)」としか書かれていないが、落款には「ハダ テルヲ」とあるので、秦テルヲの作品だと分かる。《アブサンとシヤヌイー》の「アブサン」は酒のアブサンだと思われるが、「シヤヌイー」が何を意味するのかわからない。不明である。

この作品は秦テルヲの大規模な回顧展の図録^(註四)には掲載されておらず、現存するかどうか

は分からない。原画の技法・支持体・寸法などの作品情報は詳らかでないが、図版の落款に基づけば、大正二（一九一三）年六月に完成している。これにより絵葉書の発行時期はそれ以後だということになる。絵葉書の宛名面の仕切り線の位置は三分の一に見えなくもないが、三分の一というには少し高い位置にある。もし三分の一なら、仕切り線の位置は一九一八（大正七）年に二分の一が認められたので、絵葉書の発行時期はそれ以前だろうと推測できるのだが、判断が難しい。一方、宛名面上部に「郵便はかき」という表記があるが、この表記は一九三三（昭和八）年から「郵便はがき」となったので、絵葉書の発行時期はそれ以前ではないかと考えられる。したがって、本稿ではこれを一応の発行時期の下限としておくことにする。

美術作品の絵葉書は展覧会の際につくられることが多いが、一九一三（大正二）年から一九三三（昭和八）年までの間において、題名が分かっている秦テルヲの展覧会出品作品の中には《アブサンとシヤヌイー》は見当たらないので、今回の絵葉書が展覧会の際につくられたのかどうかは分からない。しかし、一九一五（大正四）年の「秦テルヲ作品展覧会」に《アブサンを飲みし群》（大正元年作または同二年作）という作品なら出品されている。^{（註七）}この作品は《アブサンとシヤヌイー》と題名の「アブサン」が共通し、制作時期も近い。同展覧会の会場を撮影したと思われる写真が残っており、^{（註八）}その写真の左から二番目に写っている絵が《アブサンとシヤヌイー》と似ているように見えるが、写真が小さいので詳細は不明である。しかし、もしその絵が《アブサンとシヤヌイー》と同じ作品であるとすれば、同展覧会の出品作の中で《アブサンとシヤヌイー》に題名と制作時期が近いのは《アブサンを飲みし群》なので、両者は同じ作品である可能性がある。

《アブサンとシヤヌイー》にはデカダンな雰囲気濃厚にあらわれている。テルヲの《女郎（花骨牌）》^{（註九）}という作品の落款には「大正二年八月」^{（註一〇）}とあり、この作品は「現存す

るテルヲ作品の中で、デカダンのメッセージを持った最初の作品である。^(註一)「といわれるが、この作品は画風とモチーフが《アブサンとシヤヌイー》と似ている。《アブサンとシヤヌイー》は《女郎（花骨牌）》よりも二ヶ月早く完成しているので、もし実際の作品が現存しないのだとしても、図版が残っていることの価値は高いといえよう。

〔註〕

- 一、この PDF とは別に用意してあるキャプションの画像を参照されたい。
- 二、なお、「テルヲ氏作品」に付された鍵括弧は、原文では始まる方と閉じる方の順序が逆になっている。
- 三、この PDF とは別に用意してある落款印章の画像を参照されたい。
- 四、笠岡市立竹喬美術館（上園四郎）・練馬区立美術館（野地耕一郎）・京都国立近代美術館（島田康朋／小倉実子）・日本経済新聞社編『デカダンから光明へ 異端画家秦テルヲの軌跡』そして竹久夢二・野長瀬晩花・戸張孤雁…』（日本経済新聞社、発行年月日は無表記だが著作権表記は二〇〇三年、以下同書を『デカダンから光明へ』と略記する）。
- 五、この PDF とは別に用意してある宛名面の画像を参照されたい。
- 六、小倉実子編「秦テルヲ略年譜」の大正二（一九一三）年～昭和七（一九三二）年（『デカダンから光明へ』「註四の文献」二一八～二二四頁）。なお、この年譜では昭和八（一九三三）年は省略されているので、昭和七（一九三二）年までを確認した。
- 七、小倉実子編「秦テルヲ略年譜」（註六の文献）の大正四（一九一五）年（二一九

頁)。 展覧会は五月一七日、同月二三日、日比谷美術館において開催された。《アブサンを飲みし群》は同展の「作品目録」の第二六番である。

八、 小倉実子編「秦テルヲ略年譜」（註六の文献）所載の「東京日比谷美術館の個展会場にて、樫野南陽と共に」（一九一五年、二一九頁）。なお、同年譜には他にも作品の展示風景などの写真が載っているが（二一七～二二三頁）、写真の画質やサイズの問題により、写っている作品の絵柄が判別できない場合も多いので、《アブサンとシヤヌイ》が写っているかどうかは分からない。

九、 秦テルヲ《女郎（花骨牌）》（一九一三年、絹本着色・額、四三・〇×一一五・五センチメートル、京都国立近代美術館）。『デカダンから光明へ』（註四の文献）cat.no.9（図版三四～三五頁、無署名「作品目録」〔二二九頁〕）参照。

一〇、 無署名「主要作品の落款印章」の第九番（『デカダンから光明へ』『註四の文献』一九三頁）。

一一、 上園四郎「秦テルヲのデカダン」（『デカダンから光明へ』『註四の文献』一七九頁）。

執筆者・発行者 植田智晴

二〇一〇年六月一九日 初稿発行

二〇一二年九月九日 第二稿発行

© UEDA Tomoharu 2010-2012

この PDF の無断での転載、複製などは禁止とさせていただきます。